

## マイ コーナー

250

### 楽茶碗の五山

左京区 田中誠孝

山の上に置き、天竜寺、相国寺、建仁寺、東福寺、万寿寺としたという。「南禅寺を別格として五山の上に置き」という処理の仕方は非常に日本的な物事の捉え方を象徴しているように思える。

そもそも五山は中国からの人の五体や五臓のそれをモデルとする風水思想や五行思想の流れであり、五節句、五腑、五臓、五大力等の通常使う言葉がその流れであることは想像がつくことである。平安京も風水思想によつて造営され、鞍馬、貴船は北の玄武にあたり、東山が青龍、鴨川桂川が南の朱雀、西は嵐山が白虎となるらしい。

茶道で使用する茶碗に楽茶碗というのがある。一楽、二萩、三唐津といわれるほど楽茶碗の位置は高いものがあるようだ。楽茶碗とは千利休（田中与四郎）の指導で初代長次郎が、聚楽第を建造するときに使用した土で焼いた今焼（聚楽焼）がはじまりとされており、二代田中常慶（利休の孫）が豊臣秀吉より聚楽第からとつた楽の印章を賜り家号としたことから楽焼となった。

本題はこの楽茶碗の口造りにある。口縁が波打つように五つの山が形成されていることが決まりになっている。

これは五つの山を現わしているのではなく五つの寺院を象徴しているという云い方がある。あとからつけた作爲によるものという云い方もある。茶道は禅宗（臨済宗）と深い関わりがあり、臨済禅寺の寺格を表す言葉「五山十刹」からの五山ということである。

後醍醐天皇が南禅寺、東福寺、建仁寺、建長寺、円覚寺としたのがはじまりで後の足利義満は相国寺を加えるために南禅寺を別格として五

山の上に置き、天竜寺、相国寺、建仁寺、東福寺、万寿寺としたという。「南禅寺を別格として五山の上に置き」という処理の仕方は非常に日本的な物事の捉え方を象徴しているように思える。

そもそも五山は中国からの人の五体や五臓のそれをモデルとする風水思想や五行思想の流れであり、五節句、五腑、五臓、五大力等の通常使う言葉がその流れであることは想像がつくことである。平安京も風水思想によつて造営され、鞍馬、貴船は北の玄武にあたり、東山が青龍、鴨川桂川が南の朱雀、西は嵐山が白虎となるらしい。

利休の思想は禅の文化を取り入れた「侘茶」という茶道様式を生み、長次郎という瓦職人をして黒楽茶碗を生みだしていく。楽茶碗は口をかわず、手捏ね（てづくね…手でこねる）の技法で作陶するが初代からこの方法だけじゃ変っていない。当代楽家の製法は茶碗が一つ入るほどの非常に小さな窯に入れて、炭を熾してフイゴを操作するもの、炭をつついて火度を上げるものが一気に、一斉に動き始め、当代が焼の瞬間をはかって短時間で焼き上げるのである。そして完成した茶碗には銘がつけられる。

初代長次郎作の「俊寛」という銘の黒楽茶碗がある。利休の弟子が茶碗をほ



長次郎作 黒楽茶碗 銘 俊寛

しいとのことで三つの茶碗を送ったところ一つを残してあとの二つは送り返してきた、それで「鹿ヶ谷の陰謀」で鬼界ヶ島に一人残された真言宗の僧俊寛の鹿ヶ谷の山荘での故事に因んで名付けられたそう。

後に鬼界ヶ島では許された者は迎えの舟に乗せてもらえたが俊寛は乗せてもらえず、出て行く舟にすがりつき、必死に乗せていつてもらいうよう頼むが、使者に引き剥がされてしまった。「是乗せてゆけ 具してゆけ」俊寛辞世の句という。

禅の文化を取り入れた五山を有する楽茶碗に世間の騒動を銘にするとはなんと面白い事である。このように抹茶茶碗や香合を通してそれに隠されている歴史や政治的背景等を知ることとなりさらに趣味の茶陶は深まるばかりである。

#### ※鹿ヶ谷の陰謀

1177年6月、藤原成親、西光、俊寛ら後白河法皇の近臣が京都鹿ヶ谷の俊寛の山荘で平氏打倒を謀議した事件。源行綱（多田行綱）の密告により発覚し、成親は備前に流罪後処刑、西光は処刑、俊寛らは喜界島（鬼界島）に流された。

※鹿ヶ谷の俊寛の山荘 哲学の道から靈鑑寺の横のなだらかな坂を山の方へと進む。

※鬼界ヶ島 現在はつきりした場所は解らないがおおよそ下記ではないかとされている。

- ① 硫黄島 鹿兒島から約100km。俊寛堂がある。
- ② 喜界島 鹿兒島から約400km。俊寛のものといわれる墓がある。